朝夷巡島記 第八 編 二

つ
ハ
ヲ
庫
ヒ
10
40
函號
番號
冊數
へ13
3093
37

朝夷巡島記全傳第八編巻之二

東都　松亭金水編次

續輯第十三

二歳の小狗隱川ゑ漂ふ

一頭の野猪確執と釀ま

當下義邦ハ吐息吻さ。そのそのハ在下ゆ心著ぬふあくざるぶ。小四郎いとの流れ
数代相続ハん威勢ハ自然吾ふ勝ま。吾箇対の權威とて渠ゑ敬する
心ハあくれど厥ふ彩とハん挂らま。ハまざ人ゑれも和せざるふ不可ゑくんゑらハ
うど然る女ハしき條とゑて辞せハ渠ゑ笑ハ見ん。ゑとりて心ゑのおくぬりゑうゑ素諾
しゑゑ時日とさ人定めくまべゑん牙う稱理ありとて今ハ更ふ変改ゑぞこゑう真
罰と被ゑうて適得ゑる授子のそ死ゑ咲て枯るとゆ。天命ゑんび是非ハ
そま生類と害ふと佛の誡めあくくゑ人どゆ。禽獣蕃息ゆる則ハ備ま霊子。

昭和九年七月二三日 購求

門 へ13
號 3093
卷 37

国に田猟とるものい武士の道ゆん。聖人の教へなり。法て辞むべき所為ものあらず
と同谷のへべ笹蟹い四郎弘義い董次秋弘ゲ此の飾りいと美くまく
かくて其日もどづきれとも。宮小四郎弘義い董次秋弘ゲ此の飾りいと美くまく
仕立ゆ。奥丞一戸主の若詞ゆ紅の厚總み。金覆輪の鞍むきそ尾髪能くそ磨き
そそあと晴るそ牽せる。吉見の行者も入部のとき。荘柄平太胤長う借りけし
馬ゆて劣るべいんえぎりりり。秋くそゆの日ゆ至りけまど暁七ッゆ勢坊ゆんときの林
林と猟ゆ。兎狸の類ひのこと。この遣山深くくねべさのこうの獲物もあくびそ。
日出ゆるりけて。と徒の芝生ゆ幕うち廻して。准備せる刺鉾と出。或い小行竹
の酒と肴とそ皆く息と休めるゲ。農民们の吹さうる竹螺のまるをくゆえそ。
勇まかりけまど。董次秋弘い坐ゆ。まくまくゆ今い大くと待出ぬくん在下まる
先陳ゆ進と。手柄とらくしいとん。と戦まるゲくゆ通り出ゆの馬ゆ跨りく暮地ゆ

地出ゆ行者い元来望くゆあらぬ。待ゆまど心い進ちず。えもあくそありけゆ馬
飼摽吉郎い青春とのい折らい秋ムゲ傍若無人の挙動ちと。心ゆ快くまど。
如何すもと類ひきた獲物と得て秋弘の。鼻と挫さえとんのと。孫てゆもひ結さ
まど然いるべき獣も出ねばゆ。云ゆくらひてなりくゲ今秋弘ゲ地ちとんそ十去来と
君ゆゆ続き。地出ゆのんやとのひくゆ行者い荒尓うち笑ひ怪んとおりて汝
まづ姓け。吾い所より出んとなるゆそさべい先仕らんいい兎ゆまとのひ放。その保る
ゆ業踏ゲ。後まいせと請拘ゆあせ地莫んとゆまもまでも。摽吉ゲ踏さるのゆの
借馬ゆて。ゆの逸物ゆ競べて。虎と羊のごくゆそ。敢て近ちとゆ。ゆ恐ゆ後さと
十町除り。秋弘ゲ新と出夫のゆ。かくゆ新ゆ懐のごと。野猪一頭躍て来り眼怒
らし牙と噬と。摽吉と馬人とゆ蒐んくして走りけり。摽吉いんるうゆ新ゆの
僻物こまそうゆ獲物ゆうと忽地ゆちゆ矢とうちゆ番ひ。度矢と射まど追ち

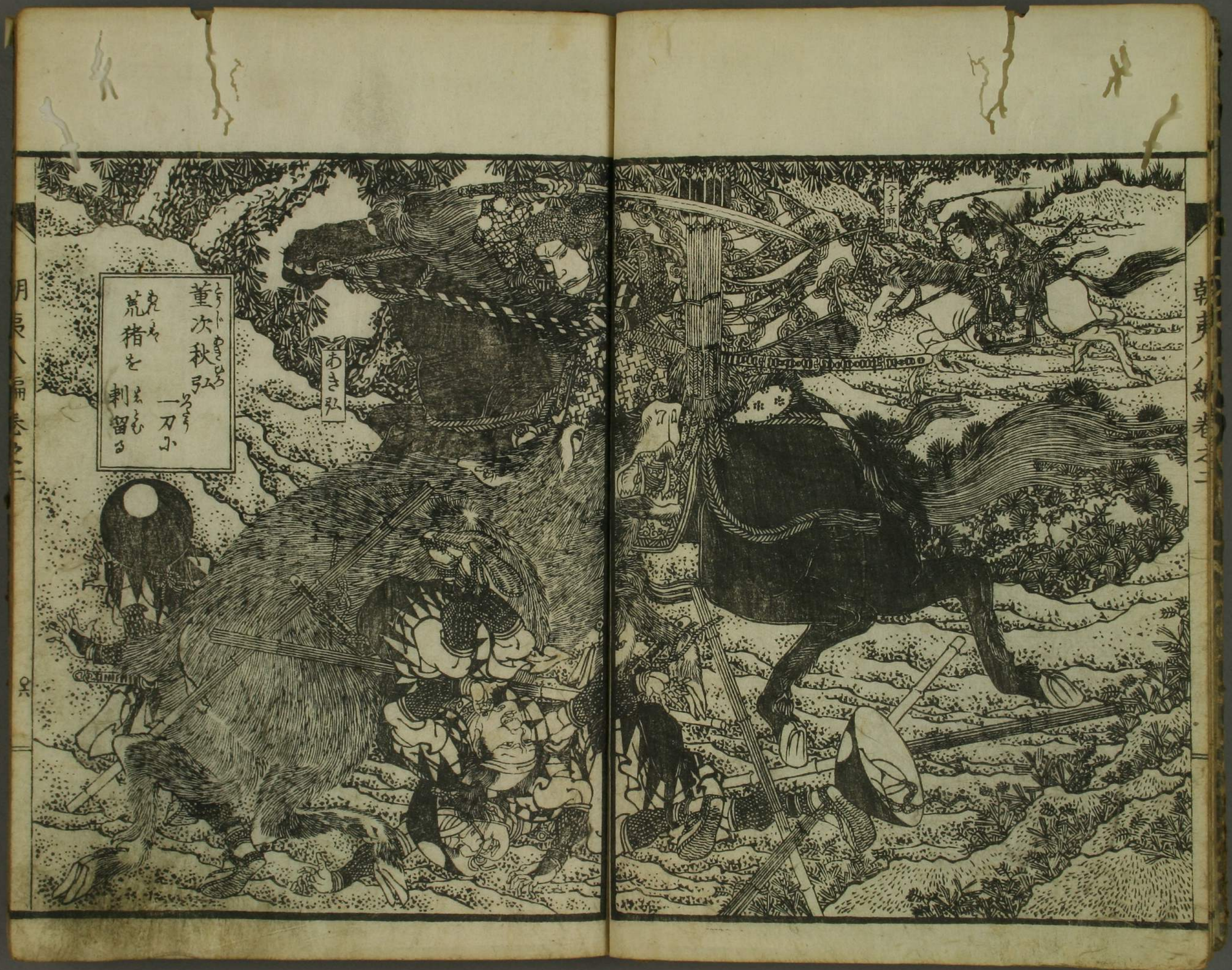
猪の太腹へ突けまとろ得ず猛き獣なれば一矢と受て猪さ〻ず怒り狂ひつ
まくまと走来るを。摽吉透さず二の矢と番ひ的と目がけて射ずけまど遠面い覬覦
し差ひて矢い耳の根ずらり。ぬりけまでとりまく急所なくぐるずあくぐまび野猪
の勢ひ摧け。そを摽吉ず敵さんとせば一散ず走り去る。逃ーいせどと摽吉い鞭と
あてずのりさくをづんとうつとども。例の駑馬ず足捷い緩く樹立ず紛まて矢ず
るまび。摽吉益焦燥て鞭跳と合せ。滑走りず奔らせる。見ようさと秋弘い辟
ぐる列卒の方ず馳せ。好き獣や出ずると同じ尚ず彼処の渓間より猜のごと荒猪
一頭躍り出てひけ。その跡ず挂らんとせば。そのこ同ず好
しべ。猪い彼方へ走り去り。主従行方いずくとも秋弘ず今一足疾かばその
猪と追ずんせどと残念ありさと呟きつ此方へ来るず見ひもろみね藪蔭ず程
ひ出でる二頭の荒猪自嵐と吹きつ。秋弘目がけて跳挂る。秋弘ずるりどんずれと。

弓ず矢番ひ眼もるる。腰ず佩さる陳太刀と。引ぬきて馬上より。猪の頭と打
けるずやいず仰ぎ太く弱りて。その佐お足を礫と打る秋弘大ず歓ひて己が
膂力の勝まくるず件の猛獣で一打ず平張ーて心地好ー恨むらくは久
あるこの働きと人ざるとと。一人心ず誇りつ。もと一打ずうちくるず。遠面い接と
倒まさり。以あるるこの猪ず向ず摽吉ず射ずるまと矢二筋受るのくる奏
通り初矢弓勢強く羽服責てうけまび指ずこそあまと心神沒ず
労まと果人と看るよりその性とて。一且威勢を揮ひけまど頻ずず昏瞑せ
折くる。陳太刀ず太く折まと佚こそ此処ず例まさと秋弘い太猪ず矢のあ巳ず
心い著び大音揚て秋弘こそ猪と刺留まと来まと。くと叫ひまび列卒ず臣
農民們ず寄つけてまとくと紛まりこまと。尚ず渓間と逃り出ーいの獣ず
ひひーかる希代の大猪と紛るく刺留のくと人間所為ずらいまと。秋猪さ

まで秋弘は。いよゝ誇り馬上にて扇を颯とうち披き。労ひあがりたる者共よ。人を息へ
絶ぬと労んじ。頓て准備の索もて縛し。本陣へ舁めけ。と指揮に列卒は腰なる
ける。索を出して四脚を緘げ。舁りて往んとなる処。馬飼標吉郎嗣忠が。かの怒る
ぞ馬に鞭あてて野猪の往方を索ね。此処か其処かと覗ひまはり。はからずしてこゝへ来りけ
るが。董次秋弘はこれをみるよりも。やよ馬飼刀祢秋弘らぞ。今日第一の獲物とすの
けましことよこの猪は。去ぬる年故右幕府。富士の巻狩とてありし
四郎忠常が。刺留しと悦あつよぶ。夫にも勝る猪なるぞや。弓矢も用ひずて陳介
のそんで一打に撃殺さんは。己が膂力の勝るにあらず。実に山神の賜なるべし。汎く
猪の年を経るは。必に松の脂を塗り。沙石の上を転びて。その毛を固うすると
は故に矢の立てるとも。縁て悦でても。爾らば猪と狩んとせば。仕損ずる
とあらんと。詫するとよふせ。太刀のそてまゝと刺留しが。いかにも人の知く。全

の毛は刺に似たりぞ。まこと是この太刀なる。息絶て後に思ひ合ぞ。雑人らぞ
怖じず震ひ戦慄なり。と。自讃の心ほ下にいふは。主然ちぬぞ慍気なる
と。標吉は心で編しつ。つらくと傍にあれ。名人に倍る猪なり。然ども秋弘
ぬ。足下が獲物とらえ。実は吾獲物なり。というてなま如何にと狼狽し。列
卒等が眼に入援ぢけれ。吾獲物とらず證明は。この太腹に矢一筋。これを弦
のこ知らるべし。今一矢耳の傍を。貫き往ひ廻りて夫は何方へか落ぬらん。
太腹の矢は深く入りて。僅に矢羽のみ見ゆるのく。引抜て一徳あまる。水沓葵の上に漆あり。
吾姓名を録してあらんと。いひまゝ秋弘心づきてかの太腹の下の方より
なる胸へかけて矢一筋射込で。漸くに五六寸羽の出てありけるを。
然あらぬ体にて列卒に命じ。矢を抜さして是とみるに。標吉が
嗣忠進よて在下が獲物なるを異論はあらじ。と言んとせしも敢ず。董次秋弘とく

うち笑ひ。不測のことを云ものかな。夫飛禽走獣は山野をもて家とし。迺卿なまじひが向方
ともなく走まはるは彼が性に任すなり。足下その熊の矢を射るとも。それを処に斃ざれば。
遁て走りくるを。吾に限らず餘の人の後にそれを利留こそんに熊の矢を射明ざれ
去ずば獲物といふ所謂なり。一旦矢を身に射るとなれど。間もなく逐詰て。その所にて
剗留ざる條もあれば。證語といはんより證拠にはすまじ。まいて劣らぬ獲物をもちて鳥屏の
者もあるなりと嘲て笑ひ。今胸もせまでまた老若獲物を身に得ぶ後より疾く来るを
馬の鼻を引向る。標吉件の悪言を聞て。口に怒をなし秋弘が馬のあたりを廻り。なにかを飛
禽走獣の所も定めず。縦飛たるは和主に譲るぞと。吾よく知たりとて。然までもその熱は既
に列卒等もこれを挟むぞ。朋と狩共てその猟。彼が勝厭に遂るまでこを捨おく
さも羨みがましく発ざるも。其所へ和主が出会て一刀にうち伏るを縁なるかな。
いへさんも傍痛き條もあれば。證拠とは云棄たる雉。肩なれど陸奥なるは
任退治の陣に在て。粗軍功も現したるぞ。和主等ごときに嘲らるまじ。そのままにしては止
じと拳を握りて眼を睜れば。秋弘は心裡に五分の恐れて慄へども。列卒等
が思はん所も恥しく。鞍壺に衛と立て。そのまま止んは如何にもせよ。対手になりなん。
と身構する。吉見の狩者はかることありとも知らねば。馬索出し。彼方此方を廻りけり。
農民们が口々に宝刀称のおよびもなき熊を獲たりと罵るを。聞つけて。何や否
城なる。祝さんと思ひて。遥に見れば彼方の樹間に縦馬のあるは。夫なるらんと。一鞭あてて
馳近づくに今一騎は標吉にて。云云の諍聞き。理は標吉にありと思へども。吾従者
なり大事は小事に発るといふ理さへ忘れねば。只標吉よ何ぞ諍ふぞよ。汝が一矢
射し獣をもそこに遁し後に人の獲たらんとて吾功なりといふは鳥滸なるものかな。それこそ
より彼者の中もむつまじく福を開くいと意もなき挙動ぞと誡めけり。こそ標吉は
少し逡巡て口を噤みたりけるか。秋弘は猶屈せずして吶くにも狩者の


あき弘
董次秋弘
一刀ふ
荒猪を
刺留る
朝倉人編巻之三
ゑゝ吉郎

莞尓とうち笑て。標吉が无礼せしは。在下に免じて。宥恕あらば大幸ならん。実
にも和殿が詞の如く、これ未だ禽走獣は誰がと主あらんや。地に獲る人が主なり。
今日の大猟は。ひとへに和殿に止めさす。去来さらば弘義にもとらせと告て。鉄しぬ人容
もなくて。かゝる奇なる獲物をあたえぬやと。随分心を用ひけるに。箇計の者も不入らず。數代
此処に住居せる和殿に手柄あらせしは。獣もしかあり気なり。とまれかくまれ天ひとつ此方に集
まれば。標吉は吉見の冠者が。穏便の計らひを悪しとはせねど。渠聟の威に慕ひ寄
人々をもおそれぬ挙動。渠とて僭上无礼なるまゝ。今始めて入部のことなり。その鼻を挫がずんば。
後に必ず大害を生ぜんずると。心中更に穏ならねど。今はせんすべなき計らひの時
節もあるべしと。胸を推へて義邦が後に立て此方へ到るに。義邦左右を顧みて標吉
を近く招き。汝らが計らひを寛宥すると。心の怒りまさに解やらねば。面色に露して
まゝど先よく是をもてなせよ。底意は偽とまでに玉を懸八千代を祝ふ為なる詞

汝さる狩を企てつるにぞ。一頭の獣の故に辞ひて仕出さんと思慮あるにや。然れ
秋弘日来より五日とも言はする事あり。吾も粗こゝに来て。汝もまことそのまゝと快
くせず。おそれり縡に著て渠が威を擢んと欲するなり。まさにしくこそ
渠等へとて。數代住て人民も太く懐く吾らの地頭となるべし。昨日今日まで
その土地の肥瘠廣陜地理をしらいまだ曽て知らざるに。人と物を頼抵て世に識
され護所新説にもなし太宰經信は任国に下向せるが。時をまち仲秋望の夜なりしに
今宵の月を賞さんと。端居しぬまゝ旅館の庭に喬木ありて月を妨ぐ。經信叟
の人をもて彼喬木を伐しめつ。終夜琵琶を弾じ。世の人風流を称へつゝ遂を
郷して。いはく。かの府に入りて其地の肥瘠且人民の疾苦を訪ひ政を定むるに
さる經信にも至らずして。喬木を伐せる佳興を催せる人もてはやさるべきが。
誰が家をも治むる事ありと確論せし。故に今日の狩倉も元来さる心に

あらねど渠等が云ふさへ然も縦く既にことに及べるまでハ。云ふなれば要とすまじ。よ
説示さまで標吉ハいふにも冠者が思慮深さと不覚に感じて心も解け。逸る思ひを
ゆひれぬと示票(?)なりて徐々と本陣なる幕のうちへ引返さんとしけるが。宮小四郎ハ
義へ鞭をあてて馳来り。只今刻卒がまへす者ハ是より乾の方にあたり。林原の裡
にまて多くの鹿とみてハ杖に彼処と猟せんとて。端に注進せりハ。さてせんかおれ
諸共に馳んと計るをなにまで。翁董次ハ艮の方へとて馳さしたり。冠者ハ乾の
方に定せ。在下と馬飼姓ともハ。北の方へ対ひて馳せ数を申に逐取なりて麾に
せよいと興あらん吉見刀称るハ土地の安内。まづよくも知りたるなり。それ者共従
ひで荒川縁と猟するよしら人捨て御とと走る。冠者ハとまる心なく。殊に日も申
下刻今よりならの時刻もあらぬに。天色暴に朦朧として風さへ烈しく吹来るに。
雨さへ降んとしたる序なりけりと思ふど各彼処へ馳ゆくに吾のこの処に従まくべ。

此怯なりと嘲らまんまづ彼処まで伴ひてんぞやとて。其処なる雑人ばら一個と共に
立て馳出れ。こゝに奇しき話説あり。是より前吉見の冠者鎌倉に故ありて在柄に
皱に蟄居のとき。何方よりか二歳ばかりの白き狗来りぬ。折節冠者の庭に出
まで衣の裾に馴寄縁でやそと気になりとみけまで冠者へとまにときまりて具審に食て
よべ名を並松と号けて狗ハ元来陽獣なれバよく人の恩を知り日がな絶鳥取祁(?)蔦の
狗より世々の丞史なりんと云ふもまこと鮮しとまでぞ。ずぐりて文石の小丸のごとき白狗なりて妖と
身なりしかれども遠ハ尋常の狗にあらず幻術をまで獣なれバ愛させべきにハ。この狗に
若めのかりと日来窮屈まで々まで並松よく馴ま狡き後初の出入にも冠者が傍を
離るゝときなり。聞ても入部の時も下部等に牽させ鎌倉より伴ひつるが。その
道路にて他の狗がまごとも吼ることさへ並松その尻へにさげれども更に恐るゝ気色
なく。悠然として向もせず。適他の狗吼近著バ牙を怒らしまとて威まで不群大

さるに伴ひつれたる冠者は馬上にてこれを見てその狗希代の逸物なりき。谷方より来りけむよしあれのて渇にけりと心裡に歎びて猶侍ちつゝ垂ろる。この日もまた並松は冠者に従ひて来たり。斯て堂下並松は冠者が跪ねる馬に副て後ざまへせりよもり来るを冠者は折々顧みて並松よ後るなと声かけながら跪なる程に道筋に溝川ありて隠川と唱ふるよしその幅およそ三丈なり。山川なれば瀬は浅けれど漲る水は滝に似たり。彼安楽内に来りし者等は馴て少しも懼とせざれ、その川にうち入りて竸ふごとく歩み渉るに冠者も馬を颯とうち入れ向ひの岸へ著てかへるに並松は渉り竸て彼方此方と泅湛しつ主の彼方へ著とかんぞ水を身と拋入れ四足を足掻てその川の半までは来たりしとおもへど浪にも流されて横ざまに歩むを愕れ冠者は眺て馬を牽向け、並松なくと呼べど此方へ来んとすれど水勢の烈しさに、未に狗の力も尽ぞ川下の方へ推流さる。雑人們は是を見て、无慚や狗が流るゝぞ。夫扶けよと喚て揚四五個一叟に下立ぬれどその間に並松はまた七八間推流さるれば今は大かた遠ざかり泳著んと雅しきそれを空しく岸に上るにて不敵て吉見の冠者は馬上にて伸上り遥かにこれを並松は浮ぬ沈ぬ漂ひて岸に生る梢に隠れしやその影さへ見えずなりしかば義邦太かに嘆息してそれ牛馬六畜は水に入りて溺ることなく天性水練と渇ふものなれば心安く思ひしに水勢殊に烈くしてかく迷に推流されて往方も見えず。這は小狗の故なり。渠は尋常の狗と違ひ人に馴てよく随ひて吾に侍て離れざると親の形に副がごとし然るを今かくのごとく川にて失ふものは遺憾とするものから遠かぬ程につるとも溺れしはあらずも去来その往方を索ねて見んと宴門ぜし雑人等にと近づけて汝等は彼処へ向て宮氏父子まで標吉も在べければ好路とのりし番並松が往方をたづねて吾は川下の方へ往ぬ欺ぞ安否を知らば速に来るべし。

さまへ在下ゞ候ゆへ心任せに得せしまよとて庭まで伴ひへしとひひつ許て待ん〻す雜人等を畏こりて但その内ハ一両個ありてまいらせ候へ相公ゟ傳副て何方まで御供せんとて将地頭くらべなんと引分まて三三日後ゟ着て近来る冠者ハ件の川端を行と既ゟ十町餘を経るにこの川副ゟ棘枳殻らしが上ゟ生茂りて路もならず馬の足さへ立ざれバ僕等ハ右手へ廻るゟむかし洪水ありて此の邊押堀となりしといひし大なる池さへあり故ゟよく右手ゟ避てまた壮と数十町ゆき於て彼川と〻間遠ゟ隔りて今ハ樹木茂り薄高茅路を埋みて定かならねバありけれバ忽地まて失ひ後方と〻ハ雜人們馬も將続きて遠方ゟ来るのを義邦心ゟ出て並松が先途とて案内も知ずして来つるよりこの處を斯ハ如何ゟ所へ出るゟ迄この岡輙く〻斯かへと馬を控めて樹林の裡を窺ひ給ふ折しも墨て天の夕陽沈とるのみかへ更ゟその善悪を志らず困じ果るその折から旋風暴ゟ起来て雨さへ篠を束ねて突かかくゟ降くれバ冠者ハ天を仰ぎて這ハ怪からぬ嵐ゟあるぞ今日の日和の覚束なくハ思ひしが荒んとハ思ハざりしと備も便なきぞと嘆きあぐる傍の松の木蔭ゟ立ち寄て凌がんとすれど風烈しくて渾身ずぶ濡水漉しつゝ注方ゟ折から件の雜人等もやうやく馳着て冠者が馬の傍ゟうち寄り思ひもかけぬこの雨風辛き目を見給ふものかな何時までとても候ても止ハせで遂ゟ濡ぬべし飯りぬとこの大雨ゟて隠川の水嵩増し帰る路を断れたり件の川ハ彼方より水の聚る處ゟして常ゟハ深からねど斯る大雨ゟ遭ときハ暫時の間ゟ馬の脊も立ざるなり憐まむ心より二人とふたり心細くぞ在せらん元来習ひ悟るまでバ更ゟ真実ゟもおもハねど汝等吾ゟ従ひて

こゝを渚隠川水増して渡り難きに至りるべし何もの方に路うまる夫なれば偏に
なるが郷道するぞいと怪しき先なる川ふもとに丈人と覚しき馬の長と一つ引けるに
乗るふ両風いと甚く烈しく吹来り面と向くべきかもあらぬ木の葉
ふ轉じ一條の路の彼方ふ横ふ倒れたる人々といで興さるべし一日も遅き
得ぞ右左する間ふ日は暮て十歩の外も人ぞ分けまどいとのぬふ義邦も
心裡穏ならず今さり彼処へ帰りなんもの暮果て咫尺も別ぎ分その流れ知
らぬ荒川と安ふ渡らば遅あらんそも武士の乃ちふ彷徨のぬふ為り野ふ
伏し山ふ寝ること弱しとすふ見るべき者もう両風と凌ぐべき新と索めこふ
明るを飯らんのこと難人等ふも知ることふ渠等ふいさぎ便るふのふ思ふ微せども
今さらふ輙く彼らんなどふあるべき相人のゆ後も宜ありと思ふり樹之の蔭ふる
方ふ寄りて右祝左祝るふ一叢両後ひし樹蔭ありて雨の漏らぬふあるべきを忍

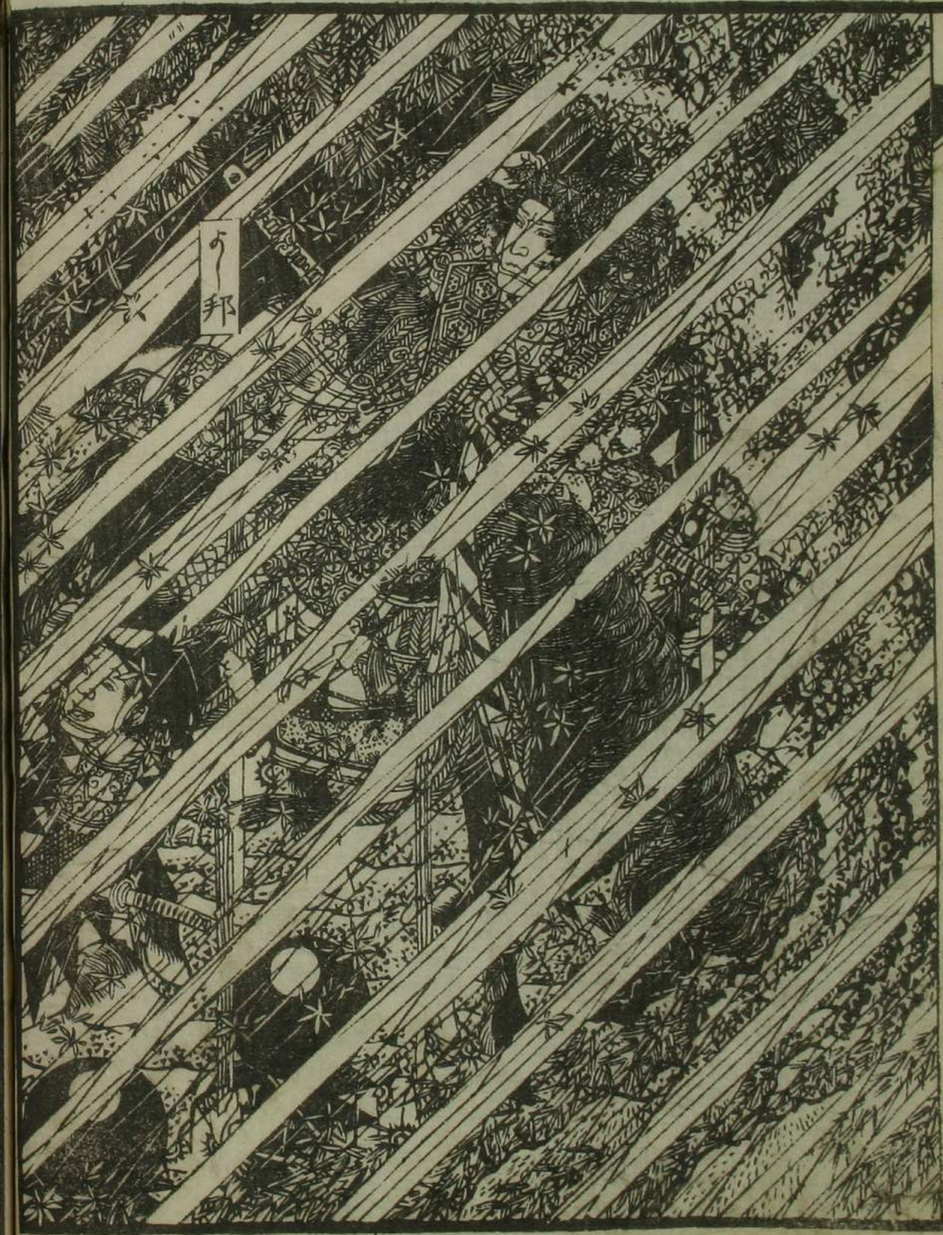
ぶふ仮りと此樹の下ふ立ち倚て雨姿時疲ると休めつゝの大雨ふ主僕ふ衣
類ふ沁ぶふ濡るゝまでこゝと乾ふ手段とるのさんと樹の下ふる枯枝打拾ふ
濡れぬと拾ひ集め燧袋と把出し漸く火とぶ移しても濕り彷るる雨中の枯枝
燃ふんといとひもとぶ立ち生ぶめくのこと更ふその絶へすりつ

續輯第十四

幻術と現化山神の祠

危難と救ふ夢葬法師

當下義邦侍と入るふ僅十段ばかりのいと舊る祠あり難人們ふ打
ひそ彼処ふ何の神と祀る祠のあると汝等知るぞ雨と変ぐふ屈竟の所ふん
とうひけるぞ難人等ふ作ぎ之這ふ怪ふ祠あること更ふ知ぎ吾
們ふ救ふの手ふの渉とぶ徒来ふ薪と伐り秣と刈り業内大ふ知りぬふ箇
計の祠あると争ふ人知るのあるぞこゝふ不測のことのふ義邦ふ哭ひ


義邦

隱川の上ふ
義邦
風雨に逢ふ

常言ふも鹿を逐ふ獵師は山を不見とぞ。汝等常ふ遠く来て薪を樵り
秣を刈るも陸奥なる樹林の程ふ世微なる初あるふ心著めるべし。右まうれ
まうと彼処へ出でそこの両風と凌ぎんと義邦馬を歩ませけば雑人ども其後ふ著き
ぬ。そこの祠蔵年を経ぬるふ軒端は両露ふ朽ちて部隔ずふ崩
れ葛ふ桂ふ人重律いや生茂り扉さえくりとうえぬ中心荒ふ荒る
祠あり。さりけるどさ犯ひ拝殿のうち廣らふて数人て納べき所あり。義邦は
右沢左沢やとう馬より下りうて馬は処なる樹ふ繋ぎ打ちる様ふ尻うち
挂て社壇の方を熟ひ入るふ宮の夜ふまび善悪も分ぬぬ安ふて人せるとも。
倘朽損じてあるふ憶ふ怪我やせん。你達もこの侍ふ腰うち挂て雨を凌げ。
とて黙然とこふ在ると桃二時ふもありぬべ。然りけるど吹く風いよいよ強く
雨さえ烈ひ加弾昼飯とて彼割符て食ひ喫ふ湯水とえ喫せるべ腹は空く咽は

乾けど撫で面る黙滴ふ。他ふ除べきのもの。今はかく窮果て雑人ども
皆ここそあるとて今の物さえ人のあく寂寞うて雨風の音のみ烈ふく響きかる
折ふ社壇の方ふ物の音ふくまるとまび冠者はいと向き見て祝ふ頭は手箱
猿猴のごく首ふ黄金の瓔珞つけて唐冠ふさーとうち被りあふ一條の涙
挺て持ての衣服は唐めきて新てその容別ぎたが。何方ようう沢はる来て。
上坐ふ居るふとび続きて人来るあり。まて虎の
頭豹の頭或ひは狐の頭もあり。各衣服は世間ふ人別まざるりのて其。
猿猴の左右ふ坐て下まび。その従者ども。面相異形の蟲共なる
装束とるく下坐ふ居て。更ふ敬ふ仕とるす。元来社壇ふ燈火のく沢はるも
又えぬ暗るのれど渠等が形は見ること月中ふ立てくふ人の義邦は心ふ怪く
て。元て深山幽谷ふ住とこの変化あり。人ふ害とるすとやどこの様ふ

山深くまぎれ。樹さえ茂りて郊野のこと。然るふこの国に有るとも。さぬ獣のあるも
評うとまかるべき孤狸の屬ひび。五こと雑うと。才の慰ふせんとそうべ。憎
さも憎しまるれ。勅さまと退治せんとて。不虞の過あるべきに。他の嗤ひの種も
なるべきぞ。怪しとうんと怪まざるとて。その妖怪消るべくば。若しこれを渡りて。なの
為に神さうんふと。変化も出さじ窺ひとる。雑人ども。この地ふ。不図顧て太歳
き。脱ふ坐と離まと戦慄怖と。冠者い者りと。低め。繰るくとうい狐狸
のつまくと威まるり。まと。辞めてこまと年と。制てまるうち。威るふ。統領る
猿猴のいまく。吾こ天帝の命と。稟て。吉見の冠者義邦が。命算と奪ひんと
こまと窺ふと。牧月のまと。渠まと名家の族まとば。輙く近付と。怪ふ今日
まで。恐ふ。止しるふ。今宵い。脱ふそのこと。果まとべきに。弟ふり。渠。単身ふ。風
雨ふ迷ひ。進退窮まりて。此処ふ居まる。このけと。遠まとべるず。玄来名。准侯れ。

渠若年ふ。あるるべく。剣法さえ。熟煉しぬまとば。並この敵ふ。あるべく。
狐の頭。のる老藤と。進め。大王さのこるる。ぬまあひて。渠ふ。ごの術。あるこ。遠
命。脱ふ。編まるべくそのえ。きと。累る。卯のごくふ。ひべ。一撃して。命と。ひつべ。吾
矢王も。知めず。神通自在。のるうべふ。三千年の世と。経まとば。世るのて。恢まるる
のるべふも。知べるるの。假令渠この所の。危まと。道まるうと。遠べるべるて。この
為ふ。害ふ。遇べきと。必せるべと。絶るるふ。述べ。虎豹の頭。のるるのも。示るるべと
点ぜべ。頓て。後方より。把ぜと。その丈五尺ばるるふて。蜀の関羽が。持るとの。青
龍刀もかくべるんと。沙べばるるの。大刀ふ。及の。恢七八寸。明晃と。輝こうして。長
して。右手ふ。引提げ。然将のごと。准侯せる。得物と。生さべると。変るるべ。三尺の。
る者の。把ぜるべ。八尺ばるるの。蛇棒ふ。鐵と。撲さ。尖べ。徒と。逆るるべ。
しと。打るべ。力の。小児の。戯まふ。稿とるん。蠅とるる。巣べ。間るべ。その。蠅と。織るべ。

り。これみて二面琴ときき。如何のあるべんと思へども気色も時と心も消て生る心地もあるぬまを。雑人ハ戦慄恐を神氷のごとく寒さう。冠者の渠等ハ物語とまさその体と熟々見て。然のこゝろハ恐まるべ。狐狸の所為あるべん若をちゝ一万ハ。這奴等ハ首を砍並べんと思ひのゝ運命縮まり。倘こと遁るゝとも。程なく人の害ハ遇べ。是も所ハ虫盗者の言葉ハあるまじ強ハ心ハ挂ぎこと無ハ。実ハ渠ハ神通と思ハ不測のこゝろハ。と心中御疑惑を懐きて。穏なるぬ折こそあまと暴ハ内ゆく電光の輝きとりて眼玄符るゝ。ひゝるゝわが義邦も嗟とらひて後ざるハ拒ぎんとして死ぬる当下件の蟲物等ハ。ほう火焔を吐出し。競ひ蒐る景物ハ雑人等ハ嗟やと叫びそのまゝ其処ハ平清て。何絶のチハ吉見の冠者ハ。こゝを大事と腰刀を抜んとをまど渾身疲て。辟月の働を自在とひまで。這ハ朽惜と乳と焦燥足と揚て跳今すれど

忍地ハの縮まりて動くとさへ動くざまに這ハ何ハせ。とゝるゝん実ハ運命縮まる。故まあゝん然ハあま吾苟くも皇胤るゝハ。獣とゝハかく悩まさ是ハ。ハ欲せんとさへ恢ハた。阿容と此処ハ死とさゝハ。後代とその祖廟ハて天神地祇ハ。ハ仆ゝ。嗟悔やと刃と岡ハまど筋骨更ハ。ハ任せ。何とも詮方ハ。かの蟲物等ハ。ハ害さ。ハ害さと。左右ハ手も下さ。冠者ハ前後と取捺て火焔を吐出し大刀ハ蛇棒ハと左振りて微塵ハ。ハさんと生ハめくのと。冠者ハ悔ハさ遍虎ゝ。流ゝ汗ハ両ハ手ひ更ハ生ゝる心地もゝ。吾ハ。ハうハ宿業ハ。一日ハ時安堵ハ住せん絶ハ。ハ苗生ハ。ハ責ハ遇て。ハと苦ゝ。こハ絶ゝと仇ゝん。吁命ハ。ハ時。ハ。と良欲息ハ及べ。ハ件ハ蟲物忽地ハ。ハ怖ハ色ハ。ハ。ハ左右ハ立開くと何ハ。ハとゝハ奔来ゝハ並松ハ。冠者ハ。

並松よ。汝が往方を索ねんとて風雨に遭ひこゝに宿り虫物の難あらん。今こゝに力を扶け将ごせよといひも果ねに並松は牙を噬ミ眼を怒らし。この大王と称へらる猕猴を目かけて跳り蒐る勢ひ宛然飛るがごとし。かの件の大王及び虎豹熊狐の虫物等周章狼狽社壇を蹴えて何方ともなく飛去れば並松は空に対ひ一声高く吼えしが。こゝに其往方を失ひ不測なりしハこの時に今まで痿たる狩者が渾身清くしきて素のごとく。雨風さへも頓に止て星の光も現れきたり。狩者は雑人们の傍に侍ておやの虫物は退きたり。其や農民們をと教田呼活まどえや渾身冷果て一言半句もなぎるを見に。傍は誠に死しるらん。妄轉忘るゝを悲しけり。と良雲が歎息し。然るにも一旦は斃るゝ悸まて洞絶なるとも。その侍死するも憂あらん生憎なれ薬もあらずまさ含まりすべき水さへあらねバ。介抱すべき術もなきなり。いかにせんと右視左視俳ゆかの並松は。何方の岸に游ぎ着きまさ吾こゝに在ることも知るゝを。是も猜疑の一つなりに。今虫物を逐退け。夫ようり何方へ往つらん倘かの変化を逐蒐て山深くも入ぬるかと声を張あげ並松をと教田呼へどこまですその詮なし。義邦なで呆きにあれまて惘然として佇むのとかる折から樹間より。徐と現れ出たる人あり。狩者は其とりや虫物かと飛攘へんとうち成るに睛けまどその容は老人めきて一條の杖を携え首には羽巾めきたる物を戴きて。道服めきの物を着し。言履をさそて此処をとう廻し。其まとうかるより口を開きて狩者が傍に近づき侍り。足下は吉見つ徒者なりや。つまさらの山に住る。乾坤たくの者子にて夢斉と號るものなるか吾ものは足下に好似あり。然れば先比より足下の子に凶あるを知りしか。晴に小狗として其凶を避させんと思えども。なかなかの凶の悪縁であらに難避がりす。然れどもその半は挫に足ぬべしつよく狩者難に迫らへ吾もの草菴へ指きそりて。旅さんとし思えなるは當下は老足を曳ミ狩者を伴なひまさば

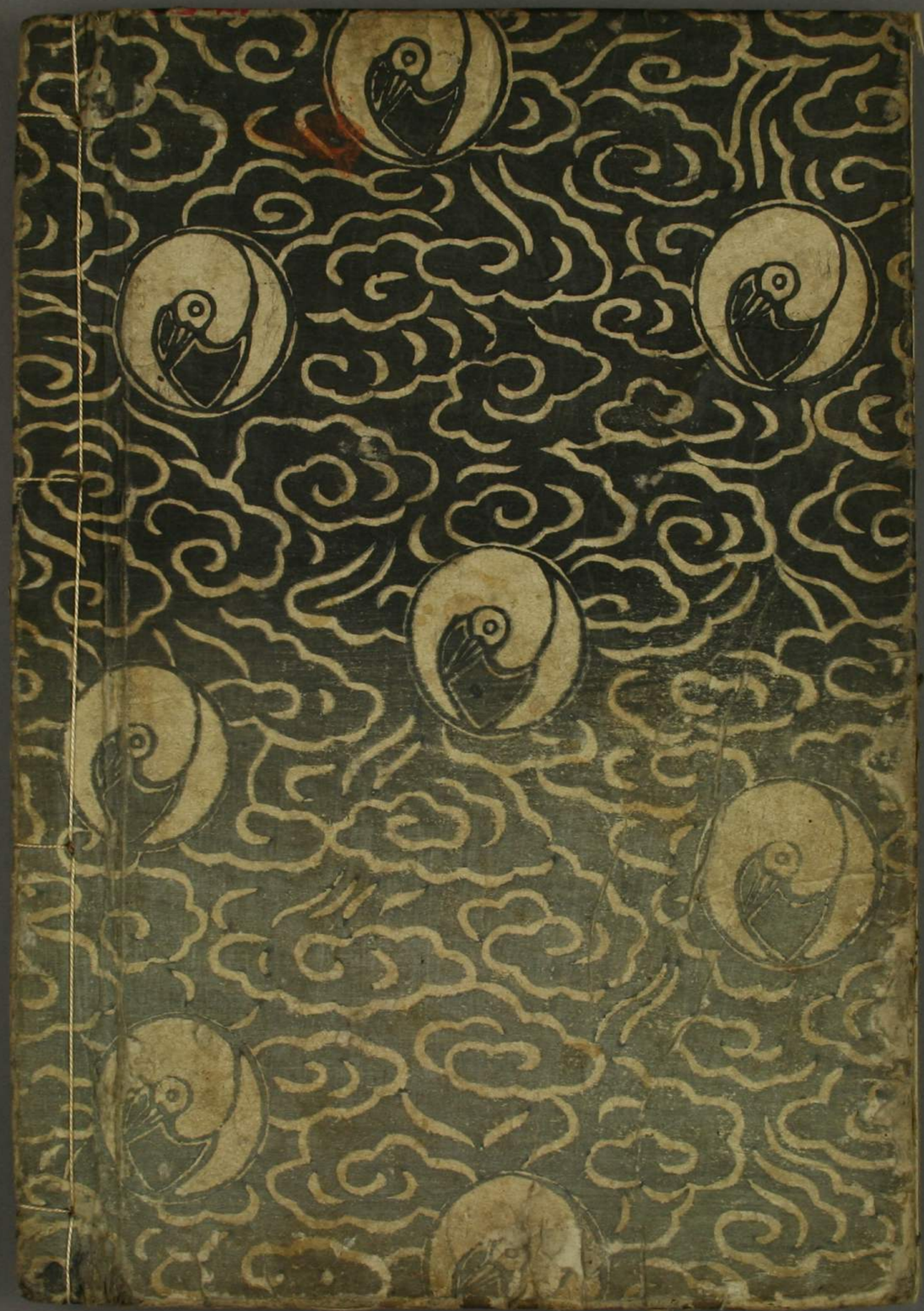
庵し。と縁て吾に託させたるが。今霄暴に吾に對ひ義邦既に危急に迫れり
頓やかに救ひ来ませその所ハ足立郡粟飯原の林中にて。山神の祠のほとりと急
がすれバと不蒡を出てこゝに来りつるなれバ道人の教に差ハず。足下がこゝに在るなん
徒まゝ面辨を求すといへども。冠者なることを疑ひあらバ。とかく詞を措るなり。と説
示せバ吉見の冠者ハ思ひかけずもうち驚きつゝにも吾ハ吉見の冠者なるが乾坤た
ん人なる如何なる人が此方にハつやく心當りもなけれど好所ありとて五百ゟの上に
危急の災害あると云ぞかし。小狗をして護らしむるハ厚なる心操。小狗ならぬ
近きに不図来りて吾も幸せん彼もまた剛親ゝ所侍と離るゝことなるが然
保に今日如此こそ一ひ往方を失ひし既にその本ともなる哉ゝ所にあり。忽然と
顕れまつが再往方を失ひたる並松のさなかへし。されバ彼狗の名人よりも去て吾
身の護りに副らせつゝ右にも左にも映くるを毎に猜疑晴ざることのなり。

既に和僧がいふ如くなら。其乾坤といふ人ハ。神仙とも稱すべし。招かざるに
僥倖なるかな。由て教へを稟ん去来案内して殤なりとて。痛ましきなる
所まで吾に從ふ農民們ふるハ悶絶えてそのまゝ死せり。渠等も驚きあり。
妻子ありその歎きさへ想像る加旃その亡骸をその侭に捨おくべき
狼の餌食となり。魂ハ宙有に迷ふらん。彼に此処に埋めてすて。和尚
所となり。追福あるべき幸慶なるべしといふを推止め農民們怪異と級て顛
倒し。霎時悶絶なすといへ。息出んとをまにあり。足下つゝしく心な労し。還
てまた埋葬なさバ後悔宜募なるべしといへんと云て埋めん
吉見の冠者ハ秋顧て腰なる拵の墨斗を撤て筆を抜出し。懐紙へ
め。綱の端に結びさげ。佐かの夢蒼弃に誘引ハ是樹立を巡り坂を登り。
行といへまだ牧断なるぬに。荊棘茂りて路を埋め。行方を弁てゆくなぞとなる

義邦難を
遁れて
夢菴ふ會ふ

性命を失ふべきなり。然るに夢葬に先立て、辰と稲荷の叢の中とを、宛も平地を走るが如し。冠者に後方より熟視て、渠に年の耳に、と教へ、乾坤道人の門に入りて、道術を嬉しうして、初めて不死の健者、人間の所為にあらざるを、知るべし。かの蠱物を、吾と再び誑さん、計較あらざるべし。夫と信じて思慮なくして、この叢林に曳入れたるまま、むとりて智にやせん。不智とやいへん。適まさに嗣忠なりしもの、這奴と捕へて、乳呵の実不足を探らんとして、吾単身にて力を尽す。況れ心のこと、労すること、安からんと、頻りに疑惑の心を生じ、進むこと三歩、退くこと三歩。道術に於て、道拙どもに、夢葬に及ること十段なり。是下夢葬に顧て、弱冠なるを、かく遅とや、棘に埋むこの径路に困じるを、然るかの吾とかの蠱物と、疑ひ、故なるん、肌に小狗の奇瑞とりて、ひの術とも、因縁色

その赤心とも、知りつつんぬ。然るに、疑ひ、なんぞ、およそ人として、孤疑深なる。大なる災害あり。故に来たる事、遅きことのあるべきと、呼立れて、今、今、進退も、谷まりぬ。吾まこと、二個の壮夫なり。任意天魔鬼神なりとも、何ぞ、のがれ、うまうまと心を励まし、お後左右に眼を配りて、かの径路を、剽して、後ひ、五六町を来りしに、面色、炬火を照して、喘ぎ、来るものは、年まだ二十四五なる、面貌、美和の若侶なるが、夢葬と、こうこう、膝行して、向に君の所の、今に、ちょうど、出ずして、と、ちょうず。庵の裡に在さるべき、処、此処、探り、ならせ、ふかくして、より、出て来るさ、炬火を、燃して、出でたる、ほどの、方角さえ、定め難く、呻吟、歩行ひ、しばらく、恙なく、出でたる、幸と、こんなりて、安堵せり、と、額着び、夢葬は、微笑、今に、拝め、汝が、好意、嬉しく、こそ、然いまを、汝も、知るべく、乃人より、霊と、翔り、来に、勝る、道術を、教へ、得て、ひ、来び、何、奈、乳、老、こと、あるん、以、の、廣、綱、あ、ぞ、う、。、面、者、て、て

その後と先ほどの歩行めぐ。冠者いとまなるのこと。彼何さ及異さうめあ
あ。殊ほ夢寐ゲ終ほ。以前の廣綱ほあるとかとうとうべ多田
前司。廣綱ほあるんぞ。倘然もあるべ愿ほ稀る。奇遇なりと
そひ。半矢ひ解るるほ足の進ほ渉ませ。後まれ世でと走るるほ再の
まのたとる未ほけむ。松栢いとも荒りてる。その侍ほ些細る。枝折戸ある公夢
葬い指さ。とまで吾ほ閑居せる。草の庵ほゆぞ。去来弦共ほ入のと。先ほえぞ
りうまで。冠者も玄関柴の戸と。推開きて程ほ入る。畢竟ととうの何るの
ある。次の巻を讀めと。

朝夷巡島記全傳第八編巻之二終